

国立工芸館(通称)ロゴタイプ決定および エントランス正面中庭の屋外作品の概要について

東京国立近代美術館工芸館(東京・竹橋、1977年開館)は、2020年夏に石川県金沢市(石川県金沢市出羽町3-2)に移転・開館するのに伴い、通称となる「国立工芸館」のロゴタイプを決定しました。

制作はUMA / design farm (代表・原田祐馬氏)によるもので、国立工芸館のサインとして活用するほか、ポスターやチラシ、封筒、ホームページ等で活用し、PRを図ります。

また、エントランス正面の中庭には、陶芸家・金子潤(1942-)氏の3mを超える大型作品《Untitled (13-09-04)》を設置し、国立工芸館のシンボリックな作品として来館者をお迎えします。

■ロゴタイプについて

国立工芸館
National Crafts Museum

国立工芸館

National Crafts Museum

国立工芸館

【UMA / design farm プロフィール】

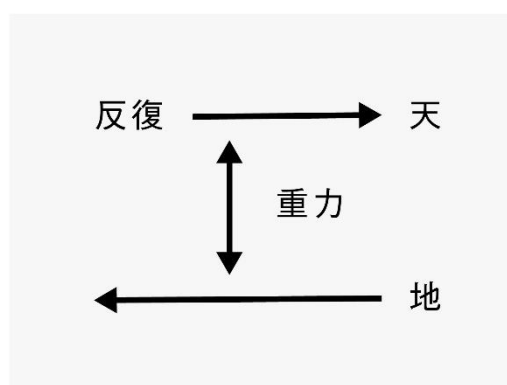


2007年、原田祐馬により設立。大阪を拠点に文化や福祉、地域に関わるプロジェクトを中心に、グラフィック、空間、展覧会や企画開発などを通して、理念を可視化し新しい体験をつくりだすことを目指している。「ともに考え、ともにつくる」を大切に、対話と実験を繰り返すデザインを実践。現在のメンバーは、原田祐馬、山副佳祐、西野亮介、津田祐果、平川かな江、岸木麻理子、高橋めぐみの7人。受賞歴はグッドデザイン2016・金賞、日本サインデザイン最優秀賞、日本タイポグラフィ年鑑ベストワーク、CSデザイン賞準グランプリなど。

www.umamu.jp

【制作にあたってのコメント 原田祐馬氏】

私たちが着目したのは「工」という漢字でした。「工」という字はたった三本の線で構成されていて、どのような書体であっても要素と構成がとてもシンプルなもの。また、古い字形を調べてみても甲骨文字など含め、古代から変わらない稀有な字の一つです。調査の中で、文化人類学者・竹村真一さんの著作「宇宙樹(慶應義塾出版社)」で「工」の思想/森の思想に出会いました。そこで記述されていた「工芸や人工の“工”という字は、もともと二本の横棒で表現された「天」と「地」を結びつける「人」の営みを表していた」ということに感銘をうけ、「工」という字を丁寧に考えなおすことで、国立工芸館のロゴタイプをつくることが出来ないかと考えるようになりました。工芸作品をよくみていくと、作者がこのようなものをつくりたいという意味が、手の反復する動きによってかたちづくられていることに気づきます。また、その反復から生まれたものを自立させる重力を感じる事が出来ます。そういった観点から「工芸」らしい字形をつくる事が出来ないか試行錯誤し、上下のラインを支える中心の線に重心を感じるエレメントをつけ、シンプルさの中に力強さとしなやかさをもたせました。私たちがここで導き出したことは、わかりやすくデザインされたものではなく、ものを人間がつくるという儚さや尊さが感じられるところをデザインしたいということでした。



■エントランス正面中庭に設置する作品の概要

金子 潤（カネコ ジュン、1942- ）

《Untitled (13-09-04)》

2013年(平成25年)

h305.3 w141.1 d85.8 cm 陶器



【作者について】

金子 潤（1942- ）

愛知県名古屋市生まれ。1963年に絵画を学ぶためアメリカ・ロサンゼルスに渡り、現代陶芸のコレクターと出会い、陶芸に魅せられる。翌年、ロサンゼルス・シュイナード芸術学校(現、カリフォルニア芸術大学)に入学し、絵画、版画、陶芸を学ぶ。その後、アメリカ陶芸を代表する作家たちと出会い、刺激を受けながら制作。1971年「現代の陶芸—アメリカ・カナダ・メキシコと日本」展(京都国立近代美術館・東京国立近代美術館)でアメリカの陶芸家として紹介される。1983年、オマハのレンガ工場で、陶作品の大きさの限界に挑戦する「オマハ・プロジェクト」を開始し、巨大な〈ダンゴ〉シリーズを完成。1984年、ボストン美術館で開かれた「アメリカ現代陶芸の動向」展において、アメリカを代表する15人の作家の一人に選ばれた。1990年代以降、高さが2.4メートルの〈ダンゴ〉をはじめ、3.4メートルの〈ダンゴ〉、さらには3.9メートルの〈トールダンゴ〉を制作して話題を集め、いくつかの作品は日本でも展示紹介された。2006年、岐阜県現代陶芸美術館・国立国際美術館で大規模な展覧会を開催。アメリカを拠点に活動。大型の陶磁制作の第一人者。

【作品について】

本作品は、アメリカ・オマハの金子スタジオで制作された高さ3メートルを超える〈ダンゴ〉シリーズの一つ。巨大な陶磁作品の制作は、ひび割れや変形が生じ易く、成形、焼成等の各工程において、極めて高い技術が要求される。本作ではパーツの組み合わせではなく、紐づくりという技法による一体成形であり、巨大な窯を用いて焼成。継ぎ目のない安定感のあるフォルムと高所から流下する釉薬の効果もあいまって、空間の中にすっと立つ姿にはモニュメントとしての存在の強さがある。

国内の美術館に収蔵される金子作品としては最大級のサイズであり、国立工芸館のエントランスホール正面中庭で来館者を出迎えるシンボリックな作品となる。石川県が九谷焼など有数のやきものの産地であること、また中庭が吹き抜けの大空間であることから、来館者を迎えるにふさわしいシンボリックな大きさをもつ本作品が選ばれた。

上部の青色は空の青を思わせ、胴部のストライプは天からの恵みの雨を思わせる。これらの色は曇天が多く日照時間が少ない金沢の地をイメージして選び出された。中庭のダークグレーの色調の中で、白と青のコントラストがより一層映える作品である。作品設置については金子潤氏に台座の高さや素材について相談のうえ、決定した。

報道関係のお問い合わせ先

■東京国立近代美術館工芸館

Tel: 03-3211-7781(工芸課直通)

広報担当/島田

E-mail: kogei-pr@momat.go.jp

公式 HP: <https://www.momat.go.jp>

■国立工芸館

石川県金沢市出羽町3-2

Tel: 076-221-2020